

熊に助けられた木樵・隠岐郡海士町

令和3年5月11日掲載

収録・解説・酒井 董美^{たによし}

イラスト・福本 隆男



語り手 渡辺松市(明治28年生まれ)
収録・昭和50年11月28日

あらすじ

昔、人が木樵りに行きておつたに、があいな大雪になつて道が分からんやあなつて、そんなときに熊が出てきて、その熊がなあ蟻をこげして(こいうふう)に拾つてよう手にすり込みすり込みして、それからまた蟻をけ、何すつかと思や、こがこがこがけ、何ててそがしておる熊がおつただわ。

大雪に困つとつたに、熊が踏んで道つけて、わが穴ん中連れて行きたちゆう。そおから、行きたら、わが側に寄せて熊は力があつけん、殺すだども、熊ちゆうもんは、「そがんことすつもんだねえ」とか何とか言つて話す。いい加減なつと手をこう握る。口のとけへ。なめてこせちゆうことだらわの、その手を。蟻をすり込んだやつ、そがして一週間も熊の穴倉におつたに、ま、雪がちいと溶けて、ほつから、いいなあーと思つて出かけたら、われ後からついて来て、そつから木樵りの男を送つたという話で、そらま、簡単な

そうほどの話だ。

解説

実にほのぼのとした心温まる話ではあるまいか。これはこれまでの連載の体裁を踏襲して「あらすじ」としたが、実際は語られたままを文字化したものである。

関 敬吾『日本昔話大成』には出ていない話型である。まさに熊に助けられた木樵りの話である。鶴の恩返しとか蛙の恩返しのように、人が動物を助けて恩返しをされる話はよくあるが、今回の話はまったく逆で熊に人が助けられている。

全国的に見て珍しいスタイルを持つこのような話が、どうしてここ離島である海士町に残されていたのだろうか。その理由はよくは分らないが、海士人のやさしさがこのような話を生み出したのかもしれない。石井正己氏(東京学芸大学教授)によれば東北地方に類話があるとのことである。

なお、ここでお断りしたいことは、これまでの連載の原話は出雲かんべの里のホームページからQRコードで開いたが、今回だけは、隠岐郡海

士町の隠岐アイランズ・メディア作成のユーチューブ登録のものを活用させていただいた。

筆者は昭和四十九年度から五十二年度にかけて隠岐島前高校に勤務しており、その関係で海士町に住んでいた。同校のクラブ活動で隠岐全域の口承文芸を収録していたが、その中で海士町に関する民話やわらべ歌などのいくつかは、平成二十二年三月から令和二年三月まで町の広報紙『広報海士』に連載していた。

それらをまとめ『海士町の民話と伝承歌』として昨年、今井出版から出版したが、この本に掲載されている話や歌をQRコードで開いて聴けるように、海士町当局と相談し、筆者が保存していた音源を提供してユーチューブ化し、ウェブサイトに登録。スマホなどを利用してQRコードを開けば、当時の音声聴けるように公開したものである。今回はそれを活用したものである。(元島根大 学法文学部教授)